

〈翻訳〉カレル・チャペック

『プラグマティズムあるいは実践的生活の哲学』(下) (補遺)

群馬大学教育学部教授 村上隆夫

文献解題と短かい研究ノート(3)

前稿に続きカレル・チャペック著『プラグマティズムあるいは実践的生活の哲学』の翻訳を提供する。使用したテキストは、Karel Čapek, *Univerzitní studie, Praha: Československý spisovatel, 1987*で、ここに収録されているのは、『プラグマティズム』の一九二五年の第二版である。この版と、さきに使用したテキストとの間には、本文に関しての変更は、一見したところない。ただし、この第二版では、註が第一版より簡略化されて、巻末にまとめられており、さらに文献目録が付されている。それ故に、註については初版のものを採用して、重複を避け、第二版の文献目録を巻末に付した。

第二版に付されたものとして今回訳出した「五つの補遺」のうち、最初の四つには一九一八年と年号が付され、最後の「ただ自分自身の

ために」だけには一九二五年と年号が付されている。使用したテキストの巻末に付されたミロシュ・ポホルスキー (Milos Pohorsky) の編集後記によれば、「一九二四年に彼(チャペック)は、今日では全体として目立たないが、しかし儉悪なかたちで行なわれた世代についての討論を始めたが、この討論はすぐにはつきりと政治的な性格を帯びて、「わたしはなぜコミュニストでないのか」というテーマのシンポジウムに受け継がれて、このシンポジウムにも彼は参加した。そして確実にこの討論を念頭に置いて、彼は(一九二五年の)第二版を準備したのであって、それに彼は若干のさらなるテキストと個人的な後書付け加えたのである。」(三六四ページ)したがって、「五つの補遺」のうち最後の一九二五年のものは、一九二四年に発表されたコラム「わたしはなぜコミュニストでないのか」に対応するものとして読まれるべ

きである。これは、カレル・チャペック『いろいろな人たち、チャペック・エッセイ集』飯島周編訳（平凡社、一九九五年）に収録されている。なお、『ユリイカ』一九九五年一月号はカレル・チャペックを集めているが、そこに所収の飯島周氏の論文「人間の魂の価値―カレル・チャペックの哲学三部作」によれば、「チェコ文学史上、その世代は『一九一四年のアルマナフ』（一九一三）という出版物に結集する傾向があつたので「一九一四年世代」とも呼ばれているが、チャペック兄弟はその代表とみなされ、別名を「チャペック世代」または「プラグマティズム世代」とも言う。」（『ユリイカ』一九九五年一月号、青土社、八九ページ）したがって、この補遺はこの「世代」を廻る論争の記録である。

この特集号に収められた沼野充義氏との対談のなかで、千野栄一氏はチャペックが通俗作家であることを否定し、知識人を含めて「みんなが読んだ」作家であつたと述べている。（同書、一五三ページ）今回訳出した「補遺」においてチャペックが主張している「思考の圏域における民主制」は、彼が「コミュニストでない」理由のみならず、彼が「哲学者でない」理由をも明示しているように思われ、難解な哲学的悪文しか書けなくなつた訳者としては忤怩たるものがある。

プラグマティズムあるいは実践的生活の哲学 K・チャペック

十 五つの補遺

十年か十一年前に習作として書かれた本について私は何も変更しなかった。今日ではたしかに私はいくつかの事柄を別のかたちでより批判的に表現したであろうが、しかし抽象的な哲学というフアラオの壺の彼方にある現実への渴望が私を苦しめた時代に、この哲学が私のうちに呼び起こした熱狂を私は今日でも恥じることはない。その時代から私の熱狂はもつと根本的でもつと思慮ぶかいものになつた。すなわちそれは哲学の手から私を得たものへの感謝になつた。今日でもきわめて多くの人々がそれらのうちにきわめて多くのものを発見できると、私は考えている。したがって私はそれらの見解の説明を変更せずにそのままにして、後からの若干の補遺の他には何も付け加えていない。この補遺のうち前の方の三つは、最近の時代の大戦争からの不安と希望をもつて展開されている。

1 哲学と生活

いま私の手には著名なアメリカの哲学者ウィリアム・ジェイムズの最もよく知られた著書の翻訳があるが、それはプラグマティズムという綱領的な表題のもとにある。それはボストンでの一連の講演であつて、それによつてジェイムズはあらゆる階層のアメリカの聴衆に新しい「民主主義的」な哲学を提示しようと試みた。この哲学は彼自身が

教え、ジョン・デューイがシカゴで教え、F・C・S・シラーがオックスフォードで教えたものである。それは大きな熱狂をもって迎えられたが、哲学という尊敬すべき領域においては殆んど醜聞スキャンダルのようなものとなった。プラグマティズムは哲学へのアメリカ主義の最初の侵入として受け取られた。今日ではヨーロッパ人の生活にアメリカの政治的なイデオロギーがようやく介入するようになったので、プラグマティズムへの関心もまた時事的な鋭さを獲得している。

まず最初に、プラグマティズムとは何か。情熱的な徒歩主義者と自動車主義者である二人の人物に、A地点からB地点までの最良の道はどれかをあなたが尋ねたとしてみよう。「最良の道は山道だ」と徒歩主義者は言う。「この道はあるいは険しくて、誰でも登れるものではないが、しかしあなたをはるか高く神と自然へと導き、純粹に観照的な孤独へと導く。」「最良の道は」と自動車主義者は反論する。「それは埃っぽい道で、おそらく退屈であるが、しかし私の機械のためにはよいのである。もしあなたがスピード記録をつくらうとするならば、断固として高速道路を作れ。そしてもしあなたがすばやく誰かあるいは何かを救うべきだとすれば、ハンドルを握って自動車を運転せよ。それよりもよい道はない。」さらにこのような意見の対立のうちにプラグマティストは割って入るであろう。すなわち、最もよい「正しい」道とは、全ての生活関心事の達成へとあなたを最も確実に導くものである。問題となっている関心事のうちどれがより重要なものであるかを調べてみよう。あなたがとうとうとしている道の正しさは、この場合にはそ

のことに依存しているのである。

「真実なもの」とか「正しいもの」についてわれわれが考えている全体的なことについて事情は同じである、とプラグマティストは続けるであろう。「真理」とは、あなたを首尾よく目的へと導く思想である。「真理」とはわれわれの思考にとって有利なものである。科学的な真理についても事情は同じである。科学においてもわれわれが真理として考えている思想とは、現実の一定の領域において最もよく機能するものである。すなわちそれは最も多くの事実を最も単純なかたちで認識して、同じように成功する他の真理と衝突しないものである。全ての「真理」はたんに活動の道具であり、精神の補助であって、それによってわれわれは出来事の流れに介入するのである（ヴァイヒンガー）。「真なる思想」とは、人間が彼の環境に活動的に適応することであって、外界とのわれわれの対立から生ずるものであるが、それはこの対立が消滅するようにするためなのである（デューイ）。「真理」とはわれわれの選択とわれわれの企画の結果であり、完全にわれわれの作ったものであって、それ故に「人間は万物の尺度なのである。」（シラー、オックスフォード）われわれにとつて真理であるものは、われわれにとつてそれを信ずるほうがよいものである。そして「もしも現実によりよい何らかの生活があつて、そしてもしもわれわれがそれを信ずるならば、われわれをそのよりよい生活に向けて援助するような何らかの思想があるとすれば、それを信ずることはわれわれにとつてよりよいことであろうが、ただしそれは、その信念が他のより大きな生活関心と

たまたま衝突しないならばの話なのである。」(ジェイムズ)

あなたが見るように、プラグマティズムは結局のところ功利主義的な真理論である。真理であるものは、生活にとって有益なものである。もしも神への信仰が幸運な生活にとって役立つならば、それは真なるものである。しかしながら、もしも信仰が生活の首尾よき手引きであるならば、それは真なる不信仰なのである。このように定式化されてプラグマティズムは最も空虚な詭弁として哲学の醜聞スケッチとなったのである。しかし、自分もそのように判断すると繰り返し前に、次のように問うてみよ。もしも「真理」とは生活を利用するものだとすれば、哲学者はこの生活という事で何を考えているのだろうか。生活という事によって彼は自分自身のことを考えることができるのであって、そうなるのと彼の役に立つものは全て「真理である」か「正しい」のである。生活という事によって彼は力や幸運や実践的な成功のことを考えることができるのであって、そうなるのと彼の哲学は個人的あるいは民族的なあらゆる利己主義を正当化するのである。ここではプラグマティズムの別の洞察を探し求めて、そこからその生活概念を読み取る以外に道はない。

ここでは私は詳細に立ち入ることはできない。オックスフォード大学教授のシラーにとっては、「生活」とは自分自身の精神的な個性を展開することを意味している。それ故に、全ての思想、いかに科学的なものであれ全ての科学的な真理は、何よりもまず個人的な行為として、活動的な出来事として、自由で具体的な人間的創造として、彼の関心

を惹くのである。シカゴのアメリカ人であるジョン・デューイは「生活」ということで活動的で劇的な生活、やっかいな葛藤と厳しい闘争の生活を理解している。彼にとってはあらゆる「真理」とは何らかの危機の成功裡の解決であり、救出された活動であり、そして哲学的な真理とは、われわれの根底にある社会的ならびに生活上の危機から買戻されたものであり、自由と秩序との対立、個人的な自発性と社会的な必然性との対立から買戻されたものである。哲学は利益に仕える侍女ではなく、生活への解放者なのである。最後にウィリアム・ジェイムズにとっては、「生活」とはわれわれのうちのいずれかの者の日々の実践的で個人的な生活以外の何ものでもない。それは具体的にはその仕事と休息をともなう生活であるが、しかしまたその苦痛と欠乏、その幻滅と希望をともなう生活であって、改善されて高められるためには息もつかせぬ努力を必要とするのである。それは、そこにおいてわれわれが暗黙の悲しみと同じように暗黙のまさに神聖なる希望にも出喰わす生活なのである。全てのものを通じてわれわれによりよい人間的な在り方を信ずることを許し、それら全てのものと協働することを許すこの生活は、下等で価値のない生活ではない。そしてそれ故にそれら全てのものもまた無価値ではないのであって、その結果としてわれわれの観念も、われわれの「真理」も、それらのものとの自らのよき関係によって定義されるのである。—これらの生活概念のうちのどこに卑しい詭弁を発見することが可能であろうか、と彼は問う。反対に人間の生活の不完全性と未完結性を考慮することなく、哲学の

完全な体系を構築することこそ残酷な偽瞞ではないのか。

したがって、全体として次のように言えるであろう。すなわち、プラグマティズムは真理の新しい定義ではなく（この明らかに特殊な側面においては誰かを完全に満足させることは困難であろう）、一むしろ哲学の新しい定義なのである。主観性と功利性は哲学の欠陥ではなく、その生きた実効的な核心である。哲学は生き生きとした関心によって人間と生活に役立つのである。しかしながらわれわれがこの言葉をいかなる内容で満たすかということに、事は懸っている。そしてまさにここにおいて、あなたはプラグマティズムのうちに抽象的な価値や理論的な楽観主義を見出すことはなく、絶対者における観念的な完成への関わりを見出すこともなく、一むしろ現実的な欠落の承認と現実的な労働と改善に向けての現実的な努力を見出すのである。したがってこれが哲学へのアメリカ主義のあの侵入なのである。

2 哲学と懐疑

さて私がすでに述べたように、アングロアメリカ的なプラグマティズムは明らかに功利主義的なものであり、そしてすでにこの言葉は有用性あるいは利益を意味していて、アカデミックな哲学の眼にプラグマティズムを信用失墮させるに充分であった。失礼だが、有用性とはそれはまさに地上での汚れた私利私欲の利己的な生活の合い言葉ではないのか。それは人間を人間の奴隷にし、良心をそそのかし、その合い言葉のもとに争いを引き起こすのではないのか。この非難は無

限に続くことができるであろうが、ここでは私はしばらく好意をお願いする。外でツグミが歌っているのを聞いて、私はそれをいかに報告するだろうか。そのような春の歌がいかに悦ばしいものであるかをあなた自身は知っている。しかしいま私は、私がすでに口にしてきた不必要に抽象的な考察から私を解放するかぎり、現存の思考が私にとって特殊な利益であると感ずるのである。ツグミは自らの歌を無駄に歌っていたのではないが、われわれもまた無駄に生きることを欲してはいない。そして「無駄」という言葉には、「有用性」という言葉以外の反対語はないのであって、一少なくともわれわれのこの地上の言語においてはそうなのである。われわれがインドの行者において見るように、「有益」や、必要とあらば、まさに「無駄」よりももっと高度な道徳性の源泉が存在するということを私は認める。しかしわれわれの破局的なヨーロッパにおいては、「有益」という言葉と「無駄」に生活しない」という言葉は依然として、われわれがそれを哲学のうちに探し求めるに十分な道徳的な魅力を、個人的、集团的さらには人間的な生活に対して、もっているのである。

正統的な哲学に対して醜聞スキャンダルを引き起こすような二番目の言葉は「懐疑」である。懐疑とは不信、分裂、不確実性以外の何であろうか。懐疑がよきものであるのはただ、それがすぐに克服されうるからであって、それはちょうど、病気がよきものであるのは、ただそれが治療されうるからであるのと同じである。しかしここで私には（哲学の書物からではなく、生きている人間たちから）次のような印象が去来する。

すなわち現代人はこの懐疑に甘んずることさえもできないのであって、彼には積極的な懐疑が分別の最も自然的な形式として現われているのである。このことをジェイムズ風に言うならば、われわれは懐疑主義に対して決定的な嗜好をもっているのであって、それは明らかに、懐疑主義が生活についての遺恨に合致し、また多くの関心事においてわれわれの意に適って、われわれの助けになるからである。あなたがそれを実践的な生活においては、「ポケットの中の理性」と呼び、科学においては「批判主義」と呼び、公的な生活においては「寛容」と呼び、全体としては「幻想を弄ばぬこと」と呼ぶならば、—これら全てはある種の側面においてこの現代的な懐疑に合致しているのである。

しかしながら、懐疑は悲観主義と不可分に結びつけられているという仮説が一般的に受け入れられている。これより大きな誤ちはあり得ない。悲観主義はトルコ人の信仰やライプニッツの楽観主義と同じように独断主義的であって非懐疑主義的なものである。ライプニッツにとっては宇宙は必然的に完全であり、悲観主義にとっては世界は必然的に悪しきものである。しかしながら現代の懐疑にとってはたんに必然的であるのは、すなわち相対性だけであって、例えば道徳的な観点においては善と悪の相対性である。人間よ、兄弟よ、私はあなたについて懐疑的に考えている。あなたは私にとって偉大な道徳的な英雄ではないが、しかし悪の化身でもない。したがって私があなたを根底的に非難しないかぎり、私はあなたの悪のうちにむしろ弱さを見出し、あなたの善なる側面のうちによりよき生活への希求を見出し、そして

あなたのうちに依然として変化しうる存在全体を見出すのである。変化可能性、これは楽観主義的である術すべを知らぬ魂にとって偉大でさらに悦ばしき言葉である。まさに問題なのは、この相対性と変異性がわれわれによりよきものへの変化の可能性を開くという固い信念なのである。

完全性という理想は目標に固執する。しかしそのような理想がそもそも実現するというに誰が信頼を置くことができるのだろうか。当面のところあらゆる経験がわれわれに告げているのは、完全に全く有益な理想のための場所をわれわれに与えよということである。しかし—そしてここに全ての信頼の始まりがあるのだが—無条件の絶望なしには誰も、彼自身は何かよきものをもたらすことはできず、何かを繁榮に導くことはできず、したがって一定のまさに僅かな場所においてであっても世界を改良することはできないと仮定することはできないのである。結局のところ、もし誰かがそのような絶望状態にあるならば、彼にはすべからず手を拱いて世界の出来事に干渉させぬがよろう。全ての活動はそれ自身自らについての信頼の表明であって、それは、首尾よく成功裡に活動することは可能であって、無駄でなく、活動し、何らかの善を獲得することは可能であるという信頼なのである。諸君が活動的な人間であるかぎり、諸君は完全な悲観主義者ではあり得ない。何故なら、そのことは諸君を最も重大な損害へと導くであろうということを諸君は知っているからである。活動的な生活は懐疑と信頼を同じ程度に必要としている。あるいはむしろそれは、それがも

たらず繁栄と貧困という実りゆたかな結果というかたちで、それ自身この二つを生み出すのである。この生活において現実の問題なのは、懐疑を取り除くことではなく、むしろ信頼の力によって懐疑を維持することであり、懐疑と情熱的なエネルギーを柔軟にそして可能なかぎり粘り強く結集させることなのである。

たしかに、もしわれわれが現代的な生活に対して何か最も効果的に武装された人間を思い浮かべるならば、われわれはその者のために同程度の世間知と熱情を要求する。しかしながら現代的な生活は決して理想的なものではない。それは、われわれが生活の全く別の理想を夢想するに充分なほど悪しきものであるか、あるいはそれは、活動的な介入と集中的な気晴しを緊急に必要としていることをわれわれが見出すに充分なほど悪しきものである。これら二つのうちのいずれを選ぶのか。私がここでそれについて語ったプラグマティズムは意識的に二番目の聖マルタンの側を選ぶのである。「もしも」と、例えばジョン・デューイは言っている。「もしも哲学が、同時代の現在の実りゆたかな観念と関わったりそれに到達したりすることなく、修道僧のように罪を免かれて無垢のままであるよりも、自らの時代の生活の闘かいと利益に活動的に関与するなかで誤まちを犯すならば、それは哲学にとってよりよいことなのである。」この言葉を彼は完全なプラグマティズムの観点で語っているのである。

3 哲学と公共的生活

われわれは戦争の期間にドイツ哲学とドイツ軍国主義との関係について多くの考察を読むことができた。その思想は魅力的である。たしかにカントの義務の倫理学、フィヒテの行為の哲学、ヘーゲルのプロイセン国家の哲学、ニーチェの貴族道徳などは、ドイツ人の多くの性格的な特徴と多くの成功を説明しているように思われる。プラグマティズムとホワイトハウスの政治との関係、あるいはアメリカ哲学とウィルソン主義との比較に関する一章もおそらくは書かれるであろう。私はその一章に先駆けようとは思わない。ただ私が承認するのは、国民の理想はその哲学のうちに充分正確に反映するということであり、反対に哲学は国民の理想を準備して支える能力をもっているということである。

ウィリアム・ジェイムズはどこかでプラグマティズムを「民主主義の哲学」と呼んでいる。もし必要ならば、プラトンの哲学をそのアイデアとともに想像してみよ。このアイデアはどこか上方に存在していて、そこで完全性の純粹で特権的な位階を形づくっている。その一方でこの地上においては、悲惨で非実体的で賤しい、言わば「たんなる現象」と「感覚的な見かけ」だけが存在しているのである。もし必要ならば、プラグマティズムとカント哲学とを比較してみよ。そこでは、生まの、非実体的で、現実にはたんに労働するだけの「経験」は、「アプリアリな原理」と「純粹理性のカテゴリー」と「統制的な理念」という貴族階級の種族によって統治され支配されねばならないのである。さらに

はあらゆる合理主義と比較してみよ。そこでは理性が全能の専制君主として、自然と人間に法則を与え、啓蒙主義的絶対主義の純粹な形態として掛け算の九九表と論理学と科学と道徳を支配しているのである。世界のこれらの形態はたしかに一見して民主主義的には見えない。この思想的な世界とプラグマティズムの世界を比較してみよ。ここでは全ての「真理」、「観念」、「法則」は、絶対的で自らの力において無制限の理性の流出物あるいは産物であることを止めている。それらの力は権威主義的な権力や能力や学識のうちにはない。プラグマティズムにしたがえば、真理は支配するかわりに、「働らく」のである。したがって理性それ自身は認識の帝国における専制君主ではなく、たんなる道具であり、実践的な生活の諸々の道具のうちのひとつにすぎない。われわれが生きるのを助けること、それが理性の使命の全てである。全ての認識の始まりと目的、規準と意味は、生きた活動的な経験である。そしてすでに「経験」という概念それ自体が無制限の個性を表わしており、たとえそれ自身はより低俗でより個人的なものであろうとも、全ての経験の同等性と権威を表わしているのである。

経験のこの民主主義的な体系は最も魅力的なものを記述しているが、しかし私自身が感ずるのは、ここでは何かが足りないということである。私がより高きものに釘で打ちつけたプラトン主義化する合理主義的で絶対的な哲学は、非大衆的で勝ち誇った特徴をもっている。すなわちそれは、観念論であり、最も高い想像上の目標への精神の自由な飛躍であり、この目標は日常的な経験をはるかに凌駕しているの

である。プラグマティズムのうちにもそのような高度で完全に絶対的に優越的な目標は現われるのだろうか。明らかに否である。しかしながら他の場所で見出すのは、プラグマティズムは道徳主義によって徹底的に浸透されているということである。もしわれわれが「プラグマティックな生活」を道徳的な生活として理解し、その行動主義を道徳的な行動主義として理解しないならば、われわれはそれによって論理的にも道徳的にも前進しないだろうということである。そしてここにおいておそらく私は次のような日常的な経験を主張することができよう。すなわち、現実の活動がその活動の成功への信念を前提しているように、現実の道徳的な行為は次のような信念の深い感情を前提しているのである。それは、そのような行為によってわれわれは何かきわめて価値あるものを獲得するのだという信念であり、価値は現実存在しているという信念であり、そしてわれわれはそれらの価値によって自らの生活を正当化できるとする信念である。もしもわれわれにそのような感情が付与されるとすれば、それでもさらにわれわれは死後の天国における絶対的な報償を必要としたり、あるいは哲学者の超経験的な楽園における絶対的な道徳的な理想を必要としたりするのか、と問われる。理想と価値をわれわれは現実の生活のうちに求め、そして徹底して自分自身の生活のうちに求めるべきであつて、決して抽象的なもののうちに求めるべきではないのである。そしてさらにわれわれにとっては、最高の理想と価値が問題であるとしても、その場合でさえわれわれはそれを現実的で想像的でない生活のうちに求め

ねばならないのである。

合理主義は哲学的な観念の世界のうちに存在しているが、それと同じように政治的な洞察の世界のうちにも存在している。政治においてもわれわれは権威主義的で卓越した理性の流出物としての概念のおかげで「合法的」たりうるのであって、この理性が頼りない民主主義的な経験を制御するのである。あるいは逆に、プラグマティズム的な理解においては、理性は生活のための実践的に根拠づけられた道具として、必然的に不完全であって、それ故に個人的ならびに社会的な経験の検証に委ねられるのである。これら二つの洞察のうちいずれの方向に現代の政治的な嗜好が向かっているかについては、疑問の余地はないと私は思う。

しかし疑いなく、もしも「合法的」な理想や綱領や目的があるとすれば――明らかにそれはより高尚な理性の流出物ではなくて、より高尚な意志の流出物ではないのか。「意志」という言葉は今日きわめて流行している。「力への意志」や「国家意志」や「勝利への意志」などについて語られているのをわれわれは聞く。理性はわれわれを失望させた。したがって新しき神、活動的でエネルギーで全能の意志よ、われを助けよ。私はこの新しき神を前にした自らの恐怖を全てここで語ることはできない。もしも理性が独断的だとすれば、意志はさらにより独断的である。合理主義者が「これだけが理に適っている」と言ううとすれば、主意主義者はそれを遮って、「このことが在らねばならぬのはたんに、私がそれを欲するからである」とか、「われわれは欲す

る」とか言うのである。然り。意志は多くのことを行なうことができるが、しかし全てのことを行なうことはできない。意志は、信仰のように、山を動かすことはできるが、神秘的な美しさによって山を蔽い隠すことはできないし、民衆のみそぎによってそれを聖化することもできない。最高の諸価値は不随意的なもので、端的に自然発生的なものである。それらは生活によって創造されるもので、決して意志によって創造されるものではないのである。もし或る政治的党派が綱領として、例えば（お許し願えれば）強制的な長命を決定するとすれば、おそらくその党派はこの綱領を意図的に達成するであろう。しかしそのことによって言われていないのは、そのようにして獲得された時代が思想と意図において改良されるということである。しかしながらこのことは、現在が行為と生活において改良されるためには、より重要なことなのである。よろしい。あなたは情熱的な綱領をもっている。しかしもしあなたの生活それ自身が情熱的で活動的でないならば、そのような綱領はあなたにとって何のためにあるのか。しかしながらもし歴史の或る時点における現在が英雄的で豊かで偉大であるとすれば、そのためには政治的な綱領では充分ではなく、政治的な生活と政治的な自然発生性と政治的な活動が必要なのである。あるいは政治的な合理主義や綱領的な主意主義のかわりに、活動的な経験の世界が必要なのである。偉大な綱領は卑少な現在を聖化しはしない。結局のところ現在もまた政治的な産物なのである（一九一八年）。

4 プラグマティズムの相対主義

あらゆる哲学は、望むと望まないと、存在の一定の形式と理想を与え、あらゆる哲学はわれわれに向かつて何らか最高の満足について語っている。哲学は探求と省察において神を見ること以上にもっとよいものや、もっと純粋なものや、もっと悦ばしきものを知らない。そこには思想家の暗黙の冒険が示されており、この思想家は幾何学的なやり方で (more geometrico) 宇宙のイメージを展開し組み立てている。唯一の最高の幸福を除いて全てのもは誤まっていて偏狭に思える。すなわちその幸福とは、絶対者との融合であり、経験を離脱して全知へと直接に舞い上がることである。然り、なかんづく、そして何よりもまず全知へということである。彼にとっては学問あるいは直観が存在しうるのであり、知的な洞察あるいは端的な理性が存在しうるのである。これら全ては一定の理想のための名前であり、真理の完全な認識のための名前である。

さらに別の哲学はわれわれに別のイメージを与える。悦びをもって麗わしさのうちに生きることをエピクロスはわれわれに教えた。超人の、より高き鷲のような、しかしむしろ不毛な孤独から、卑小さを軽蔑することをニーチェは教えた。これら全ての道徳的な教説のうちに諸君はたやすく一定の神聖さの理想を認める。神聖さは、絶対的なものと同じように、無限に尋常ならざるものであり、まさに理想的なものである。ただし此所と今において、頭脳と愛という特性において、調和ないしは英雄主義という特性において、われわれがこの端的な経

験と端的な人間性のこの世界にあつてこれらの神聖さと絶対的なものに出会うのは、おそらくはそれらのものがそのようにたんなる夢想や虚構では全くないからなのである。知識が理想であろうと、神聖さが理想であろうと、— そのような最高の完全に人間的な世界という觀念なしには、おそらくいかなる哲学もないのである。

そしてここにおいてわれわれは、プラグマティズムはいかにして生活の理想をもたらすのかと問うことができる。保守的な哲学のもとではプラグマティズムは、新しい行為がそのように迎えられるのが常であつたように、詐欺や失敗や真理の劣悪化として迎えられているとすれば、それはただ、プラグマティズムが現実になにか新しいものをもたらしているという証拠でありうる。しかしここでは次のように問うべきである。すなわち、プラグマティズムの新しい価値と理想は、哲学の歴史全体のなかで強調されているものよりも、より高度でより完全なものなのだろうか。そして、もしそうでない場合は、そのうちにはそもそもひとを納得させるような何か積極的に新しいものがあるのだろうか。

プラグマティズムは精力的に、そして根本的な主題においては持続的に、認識の問題に取り組んでいる。まず最初にプラグマティズムは、認識や真理が何であるかを問うのではなく、それらがいかに生ずるかを問う。思想がわれわれにとって真なるものとなるのは、それがわれわれの経験と一致することによってである。しかしそれと同時に「経験」を広く完全に理解することが必要であり、たんに知覚と注視とし

でのみならず、理論的な実験や測定としてのみならず、さらに経験される必要や関心として、実践的な活動性や実践的な満足として認識することが必要である。われわれにとって真である認識とは、われわれの経験に合致する認識であり、したがってまたわれわれの企画と要請に合致し、われわれの活動と生活の防衛に合致するような認識なのである。

ここにおいて真理の伝統的なイメージは突然に変容する。思想と経験との純粹に理論的な合致のかわりに、思想と活動との実践的な合致が置かれて、――真理はわれわれの活動となり、われわれの生活目標の実現のための補助手段となり、生活に役立つ方策となるのである。もし鋤は大地を掘り返すことによつてよきものであり、そして杖はわれわれを支えることによつてよきものだとすれば、認識は、われわれの経験を単純化して、新しきものへとわれわれを導き、経験から成功裡の生活実践への道筋をつけることによつて、よきものなのである。真なる認識とは、一定の理由からしてわれわれの生活にとつてよきものである。

真理のこの新しい定義がたんに形式における変更にとどまらず、實質における変更でもあることは、指摘するまでもない。もしも諸君がこの定義を認めるならば、諸君は真理の背後に、たんなる偏狭な魂にとつて邪悪な契機において生活のためによきものであるような、あらゆる真理、あらゆる陽気な自己欺瞞、あらゆる解放的な仮定を認めねばならないのである。これは最終的には最悪の矛盾ではない。もしも

善良なる医者蒸留水は病人を驚異的に癒すということを見たとすると、蒸留水は薬ではないということとを彼と議論することはないであろう。しかし、蒸留水の瓶から価値物を抽水したやぶ医者とは議論することがたしかにあるであろうし、あるいはあらゆる状況において蒸留水をわれわれに注ぎかけようとする理論とは議論することがあるであろう。したがって真理の相対性は認識の無政府性ではなく、まさに真理からその絶対的な後光を剥ぎ取るのである。もしも真理が道具ならば、それは目的ではない。もしも認識が実践的な生活の手段だとすれば、明らかにそれは至高の対象であることはできず、人間の最高の目標であることはできず、むしろ実践的な生活において真なるものとして示されるのである。実践的な生活のうちに、とプラグマティズムは言う。そこに全ての目的と目標があり、全ての至高性がある。

ここには必然的に次のような問いがある。すなわち、少なくともここ、実践的かつ道德的な世界のうちに、プラグマティズムは人間性あるいは神性の何らか至高の理想を置くのだろうか。ここにはわれわれにとつていかなる秘蹟が横たわっているのか。いかなる最高の完全性がここで形づくられるのか。プラグマティズムのうちに生活のイメージを求めてみよ。諸君が見出すのはただ、諸君が人々の間で今日も明日も生きている生活そのものだけである。人間の最終目的を求めてみよ。諸君が見出すのはただ人間存在の直接的な諸目的だけである。これらの直接的な諸目的は、絶対的な対象や、例外的でおそらくはたんに想像上の完全性におけるその対象の実現についてはまさに何も語ら

ず、他方で現実的な欠落や必要に關してより多くのことをその対象によつて語るのである。そしてこれらの欠落や必要性はこの瞬間にわれわれの目的を規定しているのである。然り、この瞬間においてである。これを書いているのは、夕暮れ前の遅い午後である。私は、腕を組んで、眼を閉じて、この世界よりもよりよい世界について想像を廻らすために、それに向けてこの日没を使うことができるであろう。すなわちそれは、全てが神的な秩序の理想的な調和のうちに実現されて完成される世界である。そのような夢想は、私が自らの論説を書いて、然る後に私と他の人々にとつて必要なことを行なうために急ぐという義務の彼方に私を導くであろう。何故なら、夢想された理想と比較すれば、これら全てのことはきわめて低級で狭量なものだからである。しかしながら、この理想、このよりよき生活のために、私は現実は何を成し遂げることができのさだろうか。おそらくまさにこの瞬間においては、それはただ、私が少なくとも一人の読者に利益をもたらすために自らの論説を書こうとし、彼と自分の善に向けて自分の仕事を成し遂げようとしているということではないのか。もし私がそのような成果を希望できるとすれば、金鉱掘りが世界を黄金と無価値な物質に分けるように、私は存在者を端的な理想とたんなる悲惨な現実とに分離する必要は全くないのである。無価値な物質というものは存在しないのであつて、全ては建築の石材や彫像やモルタルや、あるいは殻物のための大地となることができるのである。もしわれわれが全てのものをただ善き活動的な意味において捉えるならば、全てのもののように

黄金が存在しているのである。それと同じように、たんなる悲惨な現実というものも存在しない。理想は—少なくとも可能性においては—到るところにあり、一日の終りにもあり、責務のうちにもあり、個人的な関心のうちにもある。ここでも問題なのはただ、われわれがそれらから何をもちたすかということなのである。

大部分の人々が実際にそのように語り、そして自ら進んで切迫したかたちで直接的かつ実践的な目的に取り組んでいることは疑いない。したがつておそらくすでに哲学者たちはそのようなものであつて、モリエールのジェルダン氏が散文を語つていたように、プラグマティズムを語つていたのではないのか。そうではないと私は思う。しかしながら、もしジュルダン氏のお喋りや不平や歓談に耳を澄ますならば、散文はいかに無限に多くのものを獲得することができるであろうか。同じように哲学もまた、労働と心配のなかで自らの生活を防衛する人々の日常的な関心に注目するならば、いかに多くのものを獲得することができるであろうか。そして—まさに体系が問題なのではなくて、哲学者の個人的な理想主義が問題なのであるが—哲学が彼らの「日常的な」生活のうちに信賴や確実性や悦びの感情を見出し、英雄主義や自発性やその他多くの、われわれが最終的な「理想」のうちに投影するのを常としてきたものの輝きを見出すということは、ありうることなのである。そのために必要なのは、自分自身も他人も軽蔑しないということであり、おそらくは人民と好意と友好と民主主義への愛と信賴であつて、決して憂鬱症ではないのである。したがつて結果として

は、「日常的な」生活とそのはるか上の理想と永遠の価値の領域とがあるわけではないであろう。そうではなくて、理想と価値は、此所において、この現実的な生活において、可能性と目的として、成功と現実的な満足として、現前しているのである。

完全な認識ないしは時間と空間の彼方の完全な秘蹟としてわれわれに呈示される理想がより高いものなのか、それともこの瞬間に、この夕暮れに、欠落と変転に満ちたこの時間に、より善き生活の可能性を発見し、成功する仕事と、ウィリアム・ジェイムズの言うように「私にとっても世界にとっても善き」ものを考える自由のための余地を見出す理想がより高いものなのか。私は決定することができない。生きる事が問題であり、生きることだけが問題である。もしもかの最も絶対的な理想が世界の欠陥のたんに言葉だけの解決であり、それを思考する者にとつてのたんなる理性的な満足であるならば、あるいは反対に、もしも世界とその可能性へのプラグマティックな信頼がたんに言葉だけの解決と理論であるならば、この両者の間の論争もまたたんに言葉だけのものである。しかしながら、どのような理想であれ、どのような価値であれ、それらに対する信念がわれわれの目下のふるまいに直接的な影響を及ぼし、もしもそれが慰安と活動的で実践的で個人的であるとともに社会的でもある道德主義との源泉であるとすれば、この信念は「私にとっても世界にとっても善き」ものなのであって、プラグマティズムはわれわれから何も奪いはいないのである。プラグマティズムが自らの主張において無限定的であるのは、プラグマ

ティズムが自らの相対主義において無限定的であるからなのである。
(一九一八年)

5 ただ自分自身のために

プラグマティズムについての私の小冊子が最初に現われた時から、われわれの文化的な生活の一世代をプラグマティズムの世代と呼ぶことが習わしとなつていく。私は別の世代に向けて語るつもりはない。実際には私はわれわれのうちにもそのような型のいかなる政党もいかなる政治的な側面も知らない。しかしながら、私はたんにガリレイ的な人々の一人であると思われ、それらの人々は（それによつて彼らの何らかの隠された欠点暴露されるというような意味において）プラグマティックだと言われているのであるから、もしもことが私に関係する場合に、そのような称号を帯びることが私にできるかどうかを述べるためには、私はこの言葉を吟味せざるを得ない。私は悦んでこの称号を受ける用意があるが、しかしそれは、まず最初にわれわれがその意味について合意するという条件つきである。（もし誰かが私の洗礼名や家族名以外の名称で私を呼ぼうという根本的な衝動を感じるとすれば、別の呼び名をも甘受しようと思う私の意欲は、何によつても汲み尽されはしない。）したがつて私自身としてはいかなるギリシアローマ的な名称にも同意するが、ただそれは次のようなことが意味される場合だけである。

1、言葉の上での解決を嫌うこと、大仰な言葉への不信、そして一

一般化という知的能力を可能なかぎりわずかしか利用しないという努力。人間の思考へのこのような関係は何らか曖昧な理由から「懷疑」と呼ばれ、極端に否定的なものと思われている。それによれば、否定的であるというのは、公理系の領域に君臨している超個人的な価値について疑って、そのかわりに人間的な関心と仕事の領域に流通している現実的で個人的な価値を承認するということである。懷疑的であるというのは、概念的な帝国のうちに神秘的なかたちで沈黙している絶対的理性の権威に訴えることなく、もしもこの世界の事柄が問題となつていなければならないならば、いくらかの健全な理性と生き生きとした個人的な関心を装備することを好むということである。懷疑的で否定的であるというのは、民衆相手の仕事（そして思考もまたそのような仕事である）に留まるということであり、一般的な観念よりもむしろ関与的な経験をもつてそうするということである。一般的な観念は特殊な欠点をもっているのであつて、それは、一般的な観念をもつては諸君は具体的な場合において何も感じないという欠点である。もしも飢えに苦しむ老婆が問題であるならば、革命という観念は驚くほどのはずれである。何らか不愉快な隣人と或る特定の「私」との忍耐つよい付き合いが問題であるならば、集団主義はこれまでのところ殆んど役に立たない。人類への積極的な信念は、たまたま別の商標の積極的な信念を持つている人間をあなたがほんの少し尊重するように、あなたを習慣づけることはない。われわれが現実を大仰な言葉で飾り立てても、悲惨な現実が改善されはしない。そのような言葉によってわれわれは

実質的な管理の不可能性以外に絶対に何も獲得しない。もしわれわれが具体的な思考において普遍的に合意すべきだとすれば、検証不可能な言葉によるあらゆる手品と独断的な主張の厚かましさと一般化する認識論的な恥知らずを根絶することが何よりもまず必要である。これこそ、あらゆる場合にわれわれが最初から考えて語らねばならぬことである。

2、現実に向かうこと。そして、哲学においてはたんなる現実ほど疑わしいものはないから、それは普通の下世話で疑いようもない現実に向かうことである。そしてそこにおいてひとは疑いようもなく食べて愛し、疑いようもなく働いて休息し、そして何よりもまず疑いようもないかたちで他の人々と社会的な関係を結んでいるのである。全ての思考においては間違いなくこの生まの現実こそ最高の権威である。それはたんに、事物が実際にいかにあるかをこの現実がわれわれに示してくれるだけではなく、さらに、それらの事物の間でそれらの事物とともに現実に活動するということがどのようなものかということをもこの現実が示してくれるからである。結局のところ現実が観照のためにわれわれに与えられているのではなく、行為のために与えられている。そして全ての行為は所与の事実からそれに続く可能な状態をめざしているのであるから、現実が、活動というかたちで規定されるならば、創造的な可能性ポテンシャルによって直接的に充填されているのである。かくしてこの現実のうちに現実的な道徳と現実的な活動と現実的な形而上学のための場所があり、そしてまさに現実的な神のための場所さ

えもあるのであって、しかもその場合にもこの現実には陽気で平凡で情熱的で日常的な現実であることを止めないであろう。事実から独立して永遠のイデア界において思考可能なものの圏域は、事実について行なうことの可能なものの圏域よりも無限に小さいものである。現実の人間の関心と必要という大地を離れるや否や、幻想がいかに干上がってしまうかは驚くほどである。しかしながら残念なことに現実には危険なほど非体系的な側面においてわれわれに示されている。もし諸君がこの現実を何らかの観念的な秩序のうちに統一しようとするならば、諸君は簡単にそれに背を向けて、事実のかわりに優勢な概念から自らの体系を構築せねばならない。まさにこれとは別の道があつて、それはもつと忍耐がよくもつと冒険的なものである。それは、現実のうちにまさに存在している対立のうちに断固として入り込むことであり、この対立を個人的に耐え忍ぶことである。それは、或る一般的な原理の委任者としてではなく、人間として、この対立を解決することである。われわれとともに此所にある神は長い道である。しかし、もしそれが何らかの優位性をもつとすれば、それは、諸君が現実を前にして眼と心を閉ざさなくともよくなったということなのである。

3、したがつてそれは自分ひとりだけの神経衰弱的な主観主義を主観的に弄ぶことともあらゆる微妙な例外性の終焉である。英雄的な解決は普通の人間によつて行なわれるのである。普通の人間とはすなわち普通感覚と直接的な意図と日常的な現実と世俗的な隣みとその他の精神的な装備を利用する被造物であつて、それらの装備を平凡

であるということとはできない。なぜならそれはきわめて膨大だからである。したがつて普通の人間は、例外的な生きものとは逆に、無限に多様な世界のうちに生活しているのであるが、それはこの世界が客観的に叙事詩的に雄大なものだからである。それは心的状態と思弁的な孤立からなるイデア界ではなく、事物と出来事と他の人々からなる三次元の世界である。しかしながらあなたは、まさに彼らの間に彼らとともにあるためには、自分で自分自身から脱却せねばならない。あなたであるものよりも、むしろ存在するものへとより多く自らの注意を向けて、「自己」を失なうことを恐れてはならない。森の中で迷つたり、人々の間に入つて行つたりする人間は、内面において自らの個性という殻の壁を照らす人間よりも、より劇的でより現実的な意味で「自己」なのである。

4、それは個人主義であるが、しかし客観的な個人主義である。もしあなたが（思考によるにせよ、あるいはふるまいによるにせよ）行為するとすれば、つねにただ自身のために行為せよ。そして、あなたではない何かの「名」において行為したり、あるいは何らか普遍的な真理という「観点」から行為するという権利を放棄せよ。世界における全ての出来事は個別的で具体的である。もしあなたが世界について何か行なうことがあるとすれば、正直にしかも同じ武器をもつて世界と対峙せよ。すなわち、あなた自身が個別的で具体的であれ。もし警官が酔つぱらひをつかまえるならば、彼はまさに法律の名の下に行為している。しかしこの瞬間には警官は哲学者ではないし、真理の問題

を解いてもいない。もしもわれわれにとって自分自身の認識や他者の説得が問題であるならば、われわれはわれわれが提示するものの真理を何によって保証するかを問わねばならない。われわれがその真理に対して自らの個人的な経験と良心の全てを賭ける以外に、何か別のものでもこの真理を見事に保証することができるのか、私は知らないのである。諸君はいかなる名において語ることもできるし、おそらくは悪魔の祖母の名において語ることもできる。しかし諸君はただ自分自身の名においてのみ世界と自分の関係を思考し調えることができるのである。それ以外のかたちでは諸君と語ることは何もないのである。

5、精神の自由を意味するもの、したがって劇的な自由裁量を意味するものは、現実の対立葛藤とのわれわれの個人的な関係に関わる全ての事柄において自分自身の裁量で決定を下すということである。そう言つてよければ、自由とはかくも贅沢で魅力的なものである。しかし同時にそれは苦悩に満ちた困難なものである。なぜならそれはあなたに対してつねに創意工夫イニシアティブを要求し、つねに不確実で、しばしば拷問のような妥協を要求し、それをあなたは個人的な失敗と感ずるからである。しかしそれは全ての行為の危険性である。もしあなたがすでに生まの事実との永続的な格闘に赴くとすれば、あなたが勝ち誇った真理という旗印をもつてつねに帰還するわけではないということを私は覚悟するであろう。旗印はよき修辭的な特性である。行為の場所では現実的な勝利は一般的にはるかに劣るかたちで祝祭的なものである。そして精神の自由もまた決してあわただしく興奮させるものではない。

い。その大部分はむしろ冷静で辛いものである。それは千の旗印の下での行進よりもはるかに心浮き立つものではない。しかしそれでも諸君は深く確実に感ずるところがあり、すなわちまさにそれが自由なのである。

6、しかし、もしもわれわれにとって現実に事実に関わるものがあるとすれば、それは決して下等で粗野で全体として非哲学的な事実に対立する哲学的で高級で特権的な事実ではない。全ての事実は哲学的であつて、全体としてあなたの行為に依存しているものである。啓蒙と同じように愚鈍さを考慮する必要がある。啓蒙された世界の観念的なイメージを描くことは全くたやすいが、広大な愚鈍な部分から世界のわずかな善に向けて努力することはより困難なことである。経験はきわめて民主主義的なものであつて、あらゆるものを受け入れている。それ故にわれわれは経験をいくらか憎悪して、存在する全てのものがわれわれの哲学の広場で投票するのを許さないのである。世界の悪しき浅薄な側面を貴族主義的に無視したり克服したりして世界のイメージを思い起こすならば、通常は樂觀主義と見なされる。私が思うに、欠乏はもつと強力な信念であり、そしてきわめて善き意志はこの信念をきわめて真剣に考慮し、しかもこの涙の谷に生き生きと執着することを失わないのである。古代的律法の神は、ソドムに対して完全に選りすぐられた十人を求めた時に、きわめてわずかしかプラグマティズムの気風を示さなかつたのである。もしも仮りに、傷つきやすいが相対的に善良な気性の普通の人々一万人で神には充分であつたなら

らば、ソドムは今日まで存続し、しかも世界はいかなる点でもより罪深くはなかったであろう。この場合には神は、狂信的な革命家のように或る種の硬直した思想に取り憑かれたままだったのである。可能なかぎり多くの事実を考察のうちに取り入れることは、可能なかぎり多くの数の人々を考察のうちに取り入れるようなものである。それは認識論の領域での社会性である。思考の圏域においても独裁制と民主制との対立や貴族制と社会的平等との対立があるわけである。もしも諸君にとって民主主義がたんなる不毛な言葉ではないならば、われわれの思考にとつても「基本的な権利の宣言」のようなものが重要である。実存している全てのものは、世界の絵と秩序のなかで同等の権利を要求するのである。

7、かくして実際にはわれわれの思考の全ての問題は、本質的には、経験に直面してのわれわれのふるまいの問題である。すなわちそれは、われわれの姿勢と関与と信頼と活動の問題であり、そして一言で言えば世界におけるわれわれの道徳的な行為の問題である。しかしここで「世界」という言葉について何とかして合意する必要がある。私にとつては世界は私の書きもの机の上で始まるのであって、ジュネーヴ会議の青白い紙で始まるのではない。階下の裏庭にいる放浪の指物師の世界は指物師や板や板を止めるネジやその他のものによつて最初から順次占められていく。われわれの世界、すなわちわれわれの現実の壮大な道徳的な世界は、思想ないしはふるまいによるわれわれの個人的な介入が及ぶところまで遠く及ぶのである。したがつてわれわれが

問題であり、われわれがこの現実にいかなる価値を与えるかが問題なのである。主要な程度に問題なのはわれわれであり、われわれがこの世界から何をもちたらずかということである。そこにおいてわれわれが毎日生活し、そこにおいてわれわれが誰かと接触し、自らの実践的な課題にもとづいて働らく現実とは、道徳的な現実であり、それ故にきわめて重要な現実である。われわれが自らの経験の圏域を確定するならば、それによつて同時にわれわれは自らの現実あるいは可能な道徳的な活動の圏域を確定するのである。「高尚な倫理的な価値」はきわめて素晴らしいものであるが、それは、他人が行なうことをはるか高みから判断することがわれわれにとつて問題であるとなれば、の話である。しかし現実の道徳的な行為は、大地の塵のなかに、多くの慣習のなかに、不分明な環境のなかに、自らの場所をもっているのである。しかしながら、もしもこの環境が最終的には、思考可能な全てのものよりもさらに途方もなくさらに高遠でさらに奇跡的でさらに無制限的なものだとすれば、もはやそれは哲学の議論に属する事柄ではなくて、むしろあらゆる現実的な詩に属する事柄である。

これらいくつかの文章を「プラグマティズム」と呼ぶことに問題がないならば、すなわち、もし私が、たんに言葉の上だけでなく、さらに行為にしたがつても、この名称に相応しいと見なされるならば、私としては嬉しい。然り、全くの真理であることは、すなわち、これら全てはまさに哲学ではなく、たんなる一定の思考方法だということである。それは最終的で最高の信念ではなく、たんに信念の一定の開か

れた可能性なのである。結局のところ、興味ぶかいことに、この方法においては、他の仮説においてよりも、最終的な信念ははるかに問題ではないのである。それは、何よりもまず、この方法で発見された信念はまさに個人的なものであって、他の信念に対して多くの点でより当面の重要性をもつものであり続けているからである。そして、もしわれわれがこの方法に身を委ねることができたならば、われわれの信念の相互の不一致も対立も、かつては普通であったよりも、一定程度は険しいものではなくなり、より重要なものではなくなるからである。無神論者と信仰厚き人間は、はるか高みにある神の栄光の問題について合意することは不可能であるが、一定の苦悩は補償を必要とするということについてはよりたやすく即座に合意するのである。もしひとたびわれわれが同一の現実において合意するならば、われわれは同一の行為についても合意するという確かな希望がある。世界の多くの思想的な対立は暴力なしには解決不可能であるように、しばしば見える。しかしながら、もしも対立が個人的な関心事というかたちに限定されたとしても、いかなる対立も解決不可能であるとは、私は信じないのである。たしかにこの方法の目的は、誤謬と害悪に満ちた現実を廻るあらゆる闘争を傲慢に手あたり次第終わらせることではない。闘争は続くが、ただその形式と目的が変化するのである。闘争は素手で、身体と身体をぶつけ合って、ヤコブが天使と闘ったように行なわれるのであって、いかなる犠牲を払っても勝利することが目的ではないのである。そして、たとえ物事の改良に関するこの闘争のうちには現実

的で眼に見える勝利はないとしても、それでも次のように叫ぶことは可能なのである。すなわち、もしあなたが私に恵みを与えないならば、私はあなたを離さない。(一九二五年)

文献目録 (一章から九章まで)

- A. C. Armstrong: The Evolution of Pragmatism. Bericht über den III. Internat. Kongress für Philosophie, Heidelberg 1909.
 René Berthelot: Le Romanisme utilitaire. Paríž 1909.
 Werner Bloch: Der Pragmatismus von Schiller und James. Zeitschrift f. Philosophie u. philos. Kritik, 152.
 J. Bourdeau: Pragmatisme et Modernisme. Paríž 1909.
 E. Bourroux: William James. Paríž 1911.
 F. H. Bradley: On Truth and Practice. Mind, N. S. XIII.
 A. Chide: Pragmatisme et Intellectualisme. Revue Philosophique 65.
 John Dewey: Does Reality Posses Practical Character? Essays Philosophical and Psychological in Honour of W. James. N. York 1908.
 John Dewey: The Influence of Darwin on Philosophy and Other Essays in Contemporary Thought. N. York 1910.
 John Dewey: Studies in Logical Theory, edited by —. Chicago 1910.
 Th. Flournoy: La Philosophie de W. James. Saint-Blaise, 1911.
 C. Gutberlet: Der Pragmatismus. Philos. Jahrbücher der Görres-Gesellschaft, XXI.
 Marcel Hébert: Le Pragmatisme. Paríž 1908.
 Alfr. Hoernlé: Pragmatism versus Absolutism. Mind, N. S. XIV.

- G. Jacoby : Der amerikanische Pragmatismus u. die Philosophie des Als Ob. Zeitschrift f. Philosophie u. phil. Kritik. 147.
- William James : The Will to Believe. Londŷn a N. York 1897.
- William James : The Varieties of Religious Experience, 1902.
- William James : Pragmatism, a New Name for Some Old Ways of Thinking, 1907.
- William James : A Pluralistic Universe, 1909.
- William James : The Meaning of Truth, a Sequel to Pragmatism, 1909.
- William James : Essays on Radical Empiricism, 1912.
- William James : Humanism and Truth, Mind N.S. XIII.
- W. Jerusalem : Der Pragmatismus. Deutsche Literaturzeitung, XXIX.
- A. Lalande : Pragmatisme et Pragmatisme. Revue Philosophique 61.
- A. Lalande : Pragmatisme, Humanisme et Vrit . Revue Philos., 65.
- A. H. Lloyd : Radical Empiricism and Agnosticism. Mind, N.S. XVII.
- Th. Lorenz : Das Verh ltnis des Pragmatismus zu Kant. Kanstudien XIV.
- Douglas C. Macintosh : Representational Pragmatism. Mind XXI.
- S. H. Mellone : Is Pragmatism a Philosophical Advance? Mind XIV.
- Addison W. Moore : Some Logical Aspects of Purpose. Studies in Logical Theory.
- D. Parodi : Le Pragmatisme d'apr s MM. W. James et Schiller. Revue de M taphysique et de Morale, 16.
- R. Proch zka : Pragmatism.  esk  revue 1914.
- John E. Russel : Truth as Value and The Value of Truth. Mind XX.
- F. C. S. Schiller : The Riddles of Sphinx. Lond. Axioms as Postulates. In : Personal Idealism, ed. by Henry Sturt. Humanism, 1903.
- F. C. S. Schiller : Studies in Humanism. 1906.
- F. C. S. Schiller : In Defence of Humanism, Mind, N.S. XIII.
- F. C. S. Schiller : Relevance. Mind N.S. XXI.
- F. C. S. Schiller : Der rationalistische Wahrheitsbegriff. Bericht  b. den III. Kongress f r Phil., 1909.
- Alb. Schinz : Anti-Pragmatisme, Pařiz 1907.
- L. Stein : Philosophische Str mungen der Gegenwart. Stuttgart 1908.
- H. W. Stuart : Valuation as a Logical Process. Studies in Logical Theory, ed. by J. Dewey.
- W. Switalski : Der Wahrheitsbegriff des Pragmatismus nach William James. Braunsberg 1910.
- Emanuel Tilsch : Aforismy a myřlenky. Praha 1916.
- Hans Vaihinger : Die Philosophie des Als Ob. System der theoretischen, praktischen und religi sen Fiktionen der Menschheit auf Grund des idealistischen Positivismus. 2. vyd., Berlin 1913.
- H. G. Wells : Scepticism of the Instrument, Mind, N.S. XIII.

(二〇〇七年九月十一日發刊)